

仏領西アフリカにおける植民地教育の導入

— 1900年-1922年の現ニジェール共和国を中心に—

谷 口 利 律

はじめに

旧フランス領の西アフリカ諸国では現在も植民地期の教育制度が引き継がれており、公教育の教授内容と、生徒の生活や実際の文化習慣との間に乖離がみられることから、学校教育が十分に機能していないと論じられることが多い⁽¹⁾。しかしながら、従来の教育研究では、現在の問題点に対して指摘するものは多くても、現行の教育の原点である植民地教育について論じるものは多くない。本稿では、現ニジェール共和国におけるフランスの植民地教育政策に焦点をあて、仏領西アフリカの植民地教育政策について考察する。植民地期の教育政策を分析することは、現在のアフリカの学校教育に関して指摘されている、就学率や修了率の低さ、教育内容の不適切さなどの問題を考える上で必要不可欠であるからである。

ニジェールを中心とした旧仏領西アフリカの教育研究者であるオリビエ・ムニエ（Olivier Meunier）によると、植民地期ニジェールの教育体制は以下3期に区分される⁽²⁾。

- ① 軍主導の統治が進められ、「即興」（improvisation）的な教育が実施された1900年から1922年。
- ② 独立採算制の自治行政組織「ニジェール植民地」（Colonie du Niger）への移行にともない、植民地行政に必要な機能として教育計画が立てられるようになった、1922年から1945年。
- ③ 一部のエリート層によってフランスへの「同化」が唱えられ、またジョルジュ・アルディ（Georges Hardy, 1884-1972）⁽³⁾の思想の影響を受けた、1945年から独立に至る1960年。

本稿では上記の区分のうち、①の1900年から1922年のニジェールを中心とした、仏領西アフリカ全体の教育制度について考察する。

本論の構成としては、まずフランス植民地主義思想について概観し、仏領西アフリカの教育体制について述べる。そして最後に、ニジェールの教育状況について述べるとともに、問題点について考察していく。

1. 仏領西アフリカにおける「文明化」と教育

1900年代初頭までの西アフリカでは、植民地主義思想を背景にフランスへの同化を目的とした多

くの植民地政策が実施された。そして、仏領西アフリカにおける教育政策も同様に、植民地主義思想の影響を強く受けていた。

フランス植民地主義思想を代表する概念のひとつに、「文明化の使命」(mission civilisatrice)がある。本来の「文明化」の概念は、フランス革命期の専制君主制からの解放のイデオロギーとして流布していたものである。しかし、フランス第三共和制政府による本格的な西アフリカ侵攻が開始される

アルジェリア征服戦線期(1830年-1847年)になると、「文明」の語は植民地イデオロギーに転換され、「文明化の使命」という語とともに使用されるようになる⁽⁴⁾。フランスの初期の対アフリカ植民地政策、つまり同化政策は、他のフランス植民地以上にこの言葉とは切り離せぬ関係にあった。

植民地イデオロギーとしての「文明化の使命」論は、進化した国であるフランスが、未開の土地や遅れた民族に文明をもたらす使命があるというもので、フランス植民地政策の根幹を成す概念であった。こうしたフランスの植民地計画において決定的な重要性をもっていたのが、植民地域における学校教育の導入である。



地図1 独立後の西アフリカ
網掛けが旧フランス植民地。
出所：TUKUI International Inc. 2006 より作成。

たとえば1899年のアルジェリアでは、西アフリカの植民地統治に際しての学校教育の役割を、フランスなどの既に「文明化した国家」の「思想に賛同させるための一番確実な方法」とであるとされている⁽⁵⁾。帝国植民地の人々に、自身の「未開さ」を認めさせ、「文明化」の必要性を説くことを可能にする学校教育は、植民地化を円滑に進めるために必要不可欠な要件だったのである。

17世紀からフランスの奴隷貿易の拠点となってきた西アフリカのセネガルでは、教育分野でもいち早くカトリック教育やフランス式の教育が導入されてきた。とくに、サン＝ルイ、ゴレ、ダカール、ルフィスクの4都市は、早くからフランスに対して「開かれた」地域とみなされた。仏領西アフリカでは、この最も早く「文明化」が始まったセネガルの4都市の住民のみが、「市民」(citoyen)として準フランス人の権利を与えられた。しかし、その他の地域の住民は、市民としての権利をもたない「臣民」(sujet)として、「原住民特別処置法」(code de l'indigénat)のもとで統治されていた。フランスは西アフリカ統治にあたり、大多数の住民を「臣民」として位置づけ、その中から首長をはじめとする特別な固体を摘出し植民地行政に取り込むという手段をとった⁽⁶⁾。それは教育においても同様であり、セネガルの都市部と、仏領西アフリカ領域内のその他の地域とで、大きく差別化が図られている。

2. 西アフリカ地域における「学校」の開設

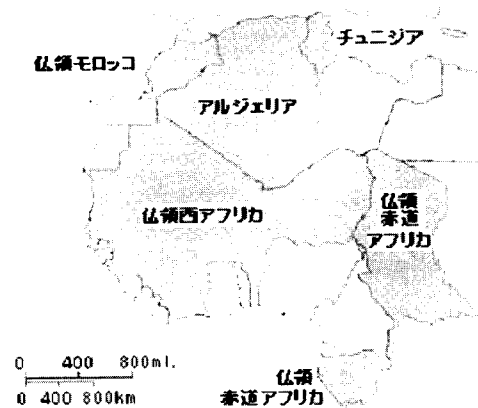
1890年の英仏協定においてフランスのアフリカ大陸での内陸進出が保証されると、フランスはセネガルを拠点として内陸部への領土の拡大を続け、1891年にはニジェールに進出する。フランス軍はニジェールの抵抗運動の鎮圧に約20年を費やすことになるが、1895年に、現在のセネガルのサン＝ルイに総督府を置く、「仏領西アフリカ」(A.O.F.: l'Afrique Occidentale Française)が創設される。これは、セネガル、ギニア、仏領スーダン（現マリ）、コートディヴォワールの4カ国で構成される。1902年に総督府はダカールに移され、上記4カ国の他、ダホメ（現ベナン）、モーリタニア、ニジェール（1922年）が植民地に加わる。この「仏領西アフリカ」は、その後、数度にわたる改編を経ながらも20世紀初頭まで維持される。各地域に

よる自治行政に移行する以前の仏領西アフリカでは、ダカールを中心にほぼ画一的な統治が行われ、ニジェールの教育も仏領西アフリカ総督府によって管理されていた。

西アフリカ地域でフランスの小学校が最初に創設されたのは、仏領西アフリカ創設以前の、1816年ないし、1817年のセネガルのサン＝ルイ（Saint-Louis）においてであった⁽⁷⁾。サン＝ルイは、17世紀からフランスの奴隷貿易の拠点のひとつとされてきたセネガル北西部の都市で、仏領西アフリカ連邦が設置される以前までは西アフリカの中心都市として栄えた場所である。サン＝ルイに創設されたこの小学校はカトリック学校で、当時はまだ、セネガル総督府を通したフランス中央政府のカトリック学校に対する財政支援も行われていた。

フランス本国は1881、82年のジュール・フェリー法で初等教育の義務化、無償化、世俗化（非宗教化）が定められ、公教育での宗教教育が禁じられる。セネガルにおいて宗教教育を行わない学校が開設されたのは1857年で、ギニアでの開設は1878年、さらには1896年の説もある。また、仏領スーダンでは1882年に、コートディヴォワールでは1893年に同様の学校が開設されている⁽⁸⁾。1903年には、仏領西アフリカにフランス本国からの指示がくだり、教育の世俗化が本格的に実施されることになった⁽⁹⁾。それまでは、イスラーム教やキリスト教などの宗教教育が施されていたが、以後、公教育の範囲内においては、本国フランスの政教分離の方針の影響を受けるようになった。

ニジェールに学校が開設されたのは、他の仏領西アフリカ地域から大幅に遅れた1902年のことであるが、これ以前からフランス軍の野営地では、下士官によってニジェール人に対するフランス語の



地図2 1914年の西アフリカのフランス植民地
出所：JACOBS, Jonathan, “Mission Civilizing,” in Tomas Benjamin (ed.), *Encyclopedia of Western Colonialism since 1450*, Tomson Gale, USA, 2007, p492 (XNR PRODUCTIONS. THE GALE GROUP.)より作成。

指導が行われていた。これが後の「学校」の前進となったとも考えられる。

3. 仏領西アフリカにおける教育

（1）教育制度

19世紀後半の仏領西アフリカにおいては、植民地行政によって実施される公教育の他に、カトリック教会や「アリアンス・フランセーズ、植民地ならびに外国におけるフランス語普及のための全国協会」(Alliance Française, Association Nationale pour la propagation de la langue française dans les colonies et à l'étranger)⁽¹⁰⁾などの民間組織も植民地域におけるフランス語教育の一翼を担っていた。

1900年代に入ると、先述のとおり、フランス本国の支持で教育の世俗化が本格的に進められることになる。1903年には仏領西アフリカで最初の教育憲章が掲げられるとともに、植民地行政内における教育管理体制も組織化された⁽¹¹⁾。また、新たな公立学校の制度も制定され、初等学校が「村落学校」(écoles des villages)、「地域学校」(écoles regionales)、「都市学校」(écoles urbaines)の3つに区分された。この区分は名称を変えながらも、1945年まで維持される⁽¹²⁾。その後、高等初等教育、技術教育などが加わるが、1918年11月に発布された「仏領西アフリカ教育一般組織施行令」(Arrêté fixant l'organisation générale de l'enseignement et Afrique Occidentale française)では、仏領西アフリカにおける教育制度が以下のように整理された⁽¹³⁾。

1. 初等教育 (enseignement primaire)
2. 高等初等教育と職業教育 (enseignement primaire supérieur et professionnel)
3. イスラーム高等初等教育 (enseignement primaire supérieur musulman)
4. 中等教育 (enseignement secondaire)
5. 高等技術教育 (enseignement technique supérieur)

現ニジェール共和国にあたる地域では、1902年8月に現在の首都であるニアメに最初の学校が開設され、1922年までは初等教育のみが実施されていた。以下本稿では、上記法令の初等教育課程について概観していく。

初等教育には、①村落学校、②地域学校、③都市学校の3区分の学校のほか、④成人教育講座 (cours d'adultes) も包括されている。このうち村落学校は、初等教育の第一段階として位置づけられており、原則として、主要な中心都市において40名以上の生徒を有することが設置基準となっている。村落学校は「準備科」(Cours Préparatoire: C.P.)と「初級科」(Cours Élémentaire: C.E.)から構成され、12歳以下の子どもを対象とし、1日5時間の授業時間、3年間の学習期間が定められている。また学習内容として、道德教育、フランス語会話と読み書き、保健、農業、飼育、地域産業 (les industries locales)、計算と測量、歌やデッサンが規定された。特に、男子については実践的な農業が、女子については裁縫や家事の授業が取り入れられている。この村落学校での学習は原則として（アフリカ人）

下級官吏（*général subalterne*）によって指導され、管理、運営に関しては行政単位⁽¹⁴⁾である「セルクル」（*Cercle*）の行政司令官（*administrateur commandant*）の監督下におかれた。

また地域学校は、県庁所在地の子どもを対象とし、「地域」（*regions*）の中心地や、「原住民」（*indigénat*）の教育がある程度進んだ地域に設置された。学習期間は、村落学校と同様の3年間のカリキュラムに加えさらに3年間で定められている。地域学校では村落学校と同様の学習科目について更に詳細に学ぶほか、歴史や地理、仏領西アフリカの行政組織に関する科目も設置されている。また、地域学校の授業は、植民地学校（*écoles de la Colonie*）の視学官から指示された教授法に基づいて行われた。地域学校の管理、運営はセルクルの行政司令官、もしくは「市長」（*maire*）の監督下におかれ、原則として実際の管理、運営はフランス軍下士官によって行われた。また、下級官吏がその補助にあたった。

都市学校は都市部や人口集中地域に設置される学校である。都市学校が対象とするのは、同化した（*assimilé*）アフリカ人やヨーロッパ人の子どもであるが、通学者数が多い場合は、教室が増設され、フランス本国の初等教育と同様のカリキュラムが導入される。都市学校卒業後は高等初等教育に進学することができる。しかし、高等初等教育機関が都市学校から近い距離に設置されていない場合は、高等初等教育と同じカリキュラムが都市学校で提供される。村落学校や地域学校からは例外的にしか生徒を受け入れない⁽¹⁵⁾。

更に、村落学校や地域学校、都市学校の就学年齢を超過した者に対しては、成人教育として1ヶ月以内の講座が設けられている。成人教育は、1週間に3日実施される。成人教育には特定の施設は設けられておらず、上述の3区分の学校の教室を利用して授業が実施される。そのため成人教育の授業は、村落学校などの初等教育の午後の授業が終了した後の1時間半の時間で行われる。学習内容としては、フランス語の読み書きや計算がある。講座の指導は、セルクルから任命された担当者が、市長や行政官と共同して行った。

（2）学校教育の2つの役割

西アフリカの学校教育も、アルジェリアと同様に、教育を通した「文明化」が主眼におかれていた。たとえば、1918年に発布された上記施行令第2条によると、初等教育の目標は「最多数の原住民への接近」であり、フランス本国の「意図や方式に馴染ませ、社会経済の発展を慎重に導く」ことであるとされている⁽¹⁶⁾。1912年から1919年まで仏領西アフリカの教育局長を務めたアルディも、その著書『精神の征服』（*Une conquête moral*）において、村落学校の最終的な目的を、「従順にする手段」（*organe d'appropriation*）であり「実質的な文明化の道具」（*instrument de civilisation matérielle*）であると述べている⁽¹⁷⁾。学校は、植民地域の住民との接触を容易にし、同化政策を実行するための最も有効な手段のひとつであったのである。

また一方で、植民地政府の設置する学校は、部族長や首長の子どもを軍に拘留し、植民地域の住民のフランス軍に対する反抗を抑制するという役割も担っていた。たとえばセネガルのサン＝ルイでは、

1855年に既に「捕虜学校」(école des otages)が設置されている。この学校は制圧区域の首長の子どもをフランス側の行政官や通訳として養成するために設置された学校である⁽¹⁸⁾。同様の「学校」の例は仏領西アフリカの各地でみられた。ニジェールのテッサウア地域のスルタン（イスラーム小国家の王）の息子2名はヨーロッパ人教員のいるトンブクトウの学校へ送られ、同君主の他の2名の息子も同様に、セネガルのサン＝ルイにある「学校」に送られている。しかし、ある地域ではこの学校を、アラビア語で異教徒を意味する「カフル」(caffres)の学校と呼んで倦厭した。さらに、自らの子ども達を学校へ送る身代わりとして従属民の子どもを送るなどしたため、軍が期待するような結果は必ずしも得られなかったといわれる⁽¹⁹⁾。

（3）ニジェールの学校状況

現ニジェール共和国にあたる地域では1904年に軍事統治が開始され、以降1911年まで、「オー・セネガル・ニジェール」(Haut-Sénégal-Niger)として軍によって管理されていた。この軍事統治は、現在のマリのトンブクトウからチャドにまで及ぶもので、領土内は、ザンデール地域、ニアメ地域、トンブクトウ地域の3つに区分けされていた。フランスの西アフリカ進出においては、行政区分の基幹として民族集団を地理的に分類し、植民地政府と住民とをつなぐ役割として各地域における首長を村長や地区長に任命する作業がおこなわれた⁽²⁰⁾。思想的にみるとそれは、領土の分割によって「未開」な集団の中から接触可能な個を探し出す、または産み出すという作業であった。

1902年にはニアメに最初の学校が設置されているが、その2年後には、ニアメとドッソにさらに一校ずつの学校が新設された。しかし、生徒数、教員数ともに不足しており、マリ駐留軍によって管轄されるこの領域内には、トンブクトウに設置されている学校に一人のヨーロッパ人教員が在籍しているのみであった。このオー・セネガル・ニジェールには、アフリカ人教員が20名程度存在し、教員ではないものの、指導員という立場で、更に3、4名のアフリカ人が配置されていた。1911年には仏領西アフリカの再編成に伴い、ニジェールの領土がマリの軍事基地ではなく、セネガル植民地総督府によって直接統治されることとなり、マリとの国境区分も定められた。国境が定められた後の1912年のニジェールでは、ニアメとザンデールにそれぞれ一校の地域学校を有し、計44名の生徒が在籍するのみであった⁽²¹⁾。1921年度になると、生徒数は674人まで増加するものの、教員数は22名と依然として少なく、初等教育を修了した生徒も8名であった⁽²²⁾。1922年には「ニジェール植民地」が発足し独立採算制がとられるようになるが、それ以前のニジェールでは、フランス語能力の不十分なアフリカ人通訳や、フランス軍の下士官が教員の役割を兼任していた。十分な指導力を有した教員が不足している状態で学校教育が推進されていたのである。

また、教育施設の整備も進展は見られなかった。ニジェールとモーリタニアを除く仏領西アフリカの国では、1922年までの間に高等初等教育機関が開設されている。しかし、現在のニジェール国内にあたる地域には高等小学校が存在しておらず、初等教育後の教育は、現ブルキナファソもしくは現セネガルの都市部に設置された高等小学校に入学する必要があった⁽²³⁾。ニジェールの教育環境は、

教育の質、量ともに、他の仏領西アフリカ地域から大きく遅れていたのである。

このような状況を受け、当時のニジェールでは、フランスの植民地政策を理解したアフリカ人教員を育成することを目的とした特別講義も実施されていた。ザンデルの地域学校では、修了資格の取得後、特に成績の優れた生徒に関しては、軍隊の欠員に応じて見習い教員に任命された。見習い期間の最初の2年間は、ザンデルの初等教育学校に雇用され、ザンデルの地域学校長の実施する特別講義を受講することとなっていた。授業は、地域学校と同様のカリキュラムを更に深めた内容になっている。講義期間の2年間で補助指導員としての適正が測られ、適正があると認められた生徒に関しては初等教育5年次の補助指導員として任命された。また、不適正とされた者は2年終了時に解雇されることになっていた。ごく稀ではあるが、学習能力が卓越していると判断された者についてはセネガルのサン＝ルイに設置されている師範学校へ進学させ、学業を続けさせることもあった⁽²⁴⁾。

4. 同化政策の中のイスラーム教

同化政策が強く反映された西アフリカ植民地域の教育政策において、例外的に認められたのがイスラーム教育である。植民地化以降に教育における宗教教育の排除が指示されるものの、イスラーム教育に関しては、「マドラサ」（*médersas*）として公教育に組み込まれる形で継続される⁽²⁵⁾。

イスラーム教は11世紀ごろにサハラ砂漠を越えて伝播し、西アフリカに徐々に普及大していった⁽²⁶⁾。イスラーム教の教育に関してもフランス植民地化以前から行われており、イスラームの教育組織として、所謂コーラン学校である「クルアーン学校」（*écoles coraniques*）もある。クルアーン学校では、イスラーム教の指導者であるマラブーによってイスラーム経典の学習やアラビア文字などが教えられるが、特定の施設は持たないことが多い。このクルアーン学校は、フランスの植民地となる19世紀までの間に数を拡大させていた⁽²⁷⁾。

植民地政府によってイスラーム文化の影響力の大きさは認められていたが、1911年5月8日の通達（*circulaire*）では、「原住民裁判」（*jugements des tribunaux indigènes*）におけるアラビア語の使用が謳われている⁽²⁸⁾。アルディの手記からは、アラビア語は「危険思想を媒体するもの」ではなく、むしろアラビア語を教育に取り入れることによって、特定の生徒が「完全に学習できるよう」な制度の構築が可能になるとみなされている点がうかがえる。その一環として公教育に取り入れられたのが、アラビア語とフランス語の両方を学ぶことのできるマドラサである。

マドラサは、植民地政府の公立学校とクルアーン学校の間隔的な役割を担う公教育機関として導入された。仏領西アフリカでは1913年にマリのジェンネの学校に（1917年までには廃止）、1918年にはトンブクトゥの学校にマドラサが導入された⁽²⁹⁾。ニジェールにマドラサが導入されるのは1957年を待たねばならないが、1922年までのニジェールの教育においてイスラーム教が大きな影響力を持っていたことは確かである。

1913年にニジェールに存在する公立学校は12校であり生徒数は350人であったが、クルアーン学校の数には239校、生徒数は5258名であったという⁽³⁰⁾。植民地政府によって設置された学校とクル

アーン学校では、どちらも暗唱を主とした学習が行われており、その教育水準には大差がないといわれている⁽³¹⁾。しかしながら、数世紀にも渡って浸透したイスラーム教の影響で、数の面からは、クルアーン学校がはるかに勝っていた。

5. 国内外の教育格差

ニジェールにおいて、植民地政府によって運営される学校教育の伸び悩みは深刻であった。教育を担当する下士官が他地域へ配置換えになると、それと同時に学校が閉鎖されるという問題点も抱えていた。1922年にニアメに第二校目の学校が設置されるまでは、多くの地域において学校の閉鎖が続いた。ザンデルの学校では、閉鎖を食い止める手段として、同地域の学校の卒業生と下士官が指導員を交代するという措置も取られたが、生徒の不登校を止めることは出来ず、1920年について閉鎖に至っている⁽³²⁾。ニジェールを含む仏領西アフリカでは、同化政策に基づいた教育政策が推進されたものの、1922年までのニジェールでは学校を機能させることすら困難な状況であった。学校は都市部にのみ設置されており、首長など伝統的社会で地位の高い層の子どもが優先的に就学できた。村落部に居住する大多数のニジェール人は学校に通うことが出来ず、ニジェール国内において就学の社会的格差と同様に地域格差が生じたことも問題視されている⁽³³⁾。

同時に、仏領西アフリカ内の地域格差も広がっていた。仏領西アフリカのその他の地域、特にセネガルでは教育が進んでおり、1907年には師範学校が、1911年には中等教育機関が設置されている。ニジェールの教育状況は他の仏領西アフリカ地域から大幅に遅れているが、その理由としては、教育の担い手が軍であり、教員の大多数がアフリカ出身者であったことなどがある。同時期のセネガルでは、既にアフリカ人エリート層へフランス式の教育が浸透しており、「開化民」(évolué)や「同化民」(assimilé)と呼ばれる人々が登場していた。1914年に第一次世界大戦に突入すると、仏領西アフリカ内ではフランスの強制的な徴兵に対して大規模な反乱も起きた。しかし、これらの人々は、積極的に兵役につくことを呼びかけた。兵役をフランス人と同等の権利を持つ手段であると考え、「血の税金」を支払うことでフランスへの完全な同化を要求したのである⁽³⁴⁾。この同化運動をどのように捉えるかは別として、当時のニジェールでは2校の学校を維持するのがやっとであったという状況に対し、セネガルでは既に教育を受けた一部の層によって、権利を主張する手段が模索され始めていたのである。確かに、フランスとの歴史的な関係に差はあったものの、当時の仏領西アフリカ内でも「教育」の進展ぐあいには大きな差があった。

おわりに

本稿では、植民地行政区分としての「ニジェール」が設置される以前の西アフリカの教育について概観し、1922年までの植民地教育政策について考察した。

フランスの西アフリカ植民地侵攻の背景には、アフリカを「文明化」し、海外領土において「フランス市民」を育成しようとする植民地主義的な思想があった。西アフリカによる教育政策は、フラン

ス国内での思想を反映し、植民地行政の運営する学校も宗教と切り離され、世俗化されていた。また植民地化の過程で、学校教育が文明化の最も有効な手段の一つとして利用され、フランス語やフランスの文化習慣を学ぶ学校が各地で設置された。さらに、首長の子ども達に対して行われる教育は、反植民地運動を抑制する役割も担っていた。

比較的早い段階からフランス式の教育が実施されてきたセネガルの状況に反して、ニジェールでは仏領西アフリカのフランス植民地政府による学校教育が進展しなかったという事実もみられた。ヨーロッパ人の教員を確保することは困難であり、多数の学校においてフランス軍の下士官が教員の役割を兼務していた。植民地化以前からニジェールに存在していたクルアーン学校に比べ、学校数や生徒数、教員数などの面で、植民地政府の学校は伸び悩んでいた。

西アフリカでの「文明化」は、フランスが当初予想していた以上に困難な作業であったが、それはまた、「文明化」という価値を強要することの限界も表しているのではないだろうか。しかし一方で、セネガルの「開化民」のように、教育が一部の層による権利運動へと繋がっていったという点も留意しておく必要はあるだろう。

本稿で扱った 1922 年までのニジェールは、他の仏領西アフリカ地域とは違い、女子が就学しておらず、私立学校やマドラサもまだ存在していなかった。1922 年にニジェール領域がニジェール植民地となり、自治行政が布かれることによって領内の教育機関を独自に組織できるようになると、この状況は変化する。しかし、教員不足や生徒の登校率の低さ、教授言語や指導内容と実生活との乖離といった諸問題は、植民地期を経た現在も依然として残されており、それらはまさにこの時代から始まっていた。

今後の課題は、はたしてこれらの問題点が、一時期に限定されたものであったのか、それとも継続性をもつものであったのかを考察することにある。今後の研究では、1922 年から独立にいたるまでの教育政策の変遷を明らかにし、かつ、フランスや植民地政府および植民地域の人々の「同化」思想がどのように変化していったかについて引き続き研究していきたい。

注(1) UNESCO, *Conference of African States on the Development of Education in Africa Final Report*, 1961, p. 3. Moumouni, Abdou, *L'éducation en Afrique*, chez François Maspero, 1964; reed., *Présence Africaine*, Paris, 1998, p. 145.

(2) Meunier, Oliver, *Bilan d'un Siècle de politique éducatives au Niger*, L'Harmattan, Paris, 2000, p. 37.

(3) ニジェールの仏領西アフリカ期に、西アフリカおよび北西アフリカの植民地教育に貢献した人物。1912 年から 1919 年まで仏領西アフリカの教育局長を勤め、1920 年から 1926 年まで仏領モロッコの教育局長を勤めた。Segalla, Spencer D., Georges Hardy and educational ethnology in French Morocco, 1920-26, *French Colonial History*, vol. 4, 2003, pp. 171-190.

(4) 西川長夫「国家イデオロギーとしての文明と文化」『思想』827 号、岩波書店、1993 年、4-33 頁。平野千果子『フランス植民地主義の歴史 奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院、2002 年、67-71 頁。

(5) Léon, Antonie, *Colonisation enseignement et éducation*, L'Harmattan Paris, 1991, 24.

(6) 真島一郎、「植民地統治における差異化と固体化—仏領西アフリカ・象牙海岸植民地から」栗本英世他編『植民地経験 人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院、1991 年、97-145 頁。

- (7) Capelle, Jean, *L'éducation en Afrique noire à la veille des Indépendances (1946-1958)*, Karthala, Paris, 1990, p.17. Moumouni, Abdou, *op. cit.*, p. 39. Meunier, Oliver, *op. cit.*, p. 19.
- (8) Capelle, Jean, *op. cit.*, pp. 19-20.
- (9) 砂野幸稔『ポストコロニアル国家と言語 フランス語公用語国セネガルの言語と社会』三元社, 2007 年, 146 頁。
 植民地行政によって規定された公教育は宗教と無係のものであったが、都市部と農村部では教育格差があり、特に農村部には、公的機関ではないものの、イスラームの教義を学ぶ「クルアーン学校」(l'école coraniques) も多数存在した。このクルアーン学校は 1912 年に「マドラサ」(Médersas) として公教育に組み込まれた。植民地での宗教教育、特にイスラーム教育に関しては、フランス本国ほど厳しく規制されていなかった。Léon, Antonie, *Colonisation enseignement et education*, L'Harmattan Paris, 1991, p. 65.
- (10) 1883 年にフランス語の普及と、文明化の推進のために創設された組織。1250 の委員会や加盟団体を介して活動を行っている。Frémy, Dominique et Michèle, *Quid: tout pour tous*, Robert Laffont, 1986, p. 752.
- (11) Kandel, I. L., *Educational Yearbook of the International Institute of the Teachers College Columbia University*, Teachers College, Columbia University, N.Y., 1932, p. 455.
- (12) 砂野幸稔, 前掲, 148 頁。Fall, Rokhaya, "Le système d'enseignement en A.O.F.," Charles Becker et al., *A.O.F. réalités et héritages, sociétés ouest-africaines et ordre colonial, 1895-1960, vol. 2*, Direction des Archives du Sénégal, Dakar, 1997, p. 1072.
- (13) A.O.F., *Journal Officiel de l'Afrique Occidentale Française*, no. 728, 1918, p. 572.
- (14) 仏領西アフリカの行政単位として、「仏領西アフリカ」(A.O.F.) 内に「植民地」(Colonie/Territoire) がおかれ、その下位区分として「セルクル」(Cercle), 「スュブディヴィジョン」(Subdivision), 「プロヴァンス」(Province), 「カントン」(Canton), 「トリビュ」(Tribu/Groupe), 「村」(Village) がおかれた。真島一郎, 前掲, 106 頁。A.O.F., *op. cit.*, p. 572.
- (15) 砂野幸稔, 前掲, 148 頁。
- (16) A.O.F., *op. cit.*, pp. 572-573.
- (17) Hardy, Georges, *Une conquête moral, l'enseignement en A.O.F.*, Armand Colin, le premier édition, 1917; reed., L'Harmattan Paris 2005, p. 46.
- (18) 平野千果子, 前掲, 199 頁。Capelle, Jean, *op. cit.*, p. 19.
- (19) Meunier, Oliver, *op. cit.*, pp. 38-40.
- (20) 真島一郎, 前掲, 106-107 頁。
- (21) Meunier, Oliver, *op. cit.*, pp. 39-40.
- (22) A.O.F., *Le Niger, Exposition colonials internationale de 1931*, Gouvernement Général de l'Afrique Occidentale Française, Société d'Editions Géographiques, Maritimes et Coloniales, Paris, 1931, pp. 75-76.
- (23) Sabatier, Peggy R., "Elite' Education in French West Africa: *The Era of Limits, 1903-1945*," *The International Journal of African Historical Studies*, vol.11, no.2., 1978, p. 249.
- (24) Meunier, Oliver, *op. cit.*, p. 42.
- (25) Léon, Antonie, *op. cit.*, p. 65.
- (26) 中村弘光『アフリカ現代史 IV 西アフリカ』, 山川出版社, 1994 年, 10 頁。
 ニジェールにイスラーム教が伝わったのは 7 世紀であるという説もある。Bernus, Edmond et al., *Atlas du Niger*, Edition Jeune Afrique, Paris, p. 26.
- (27) Halilou, Aboulaye A. G., *L'administration de l'enseignement au Niger*, ANRT., 1999, p. 38.
- (28) Hardy, Georges, *Une conquête moral, l'enseignement en A.O.F.*, Armand Colin, Paris, 1917; reed., L'Harmattan Paris, 2005, p. 89.
- (29) Capelle, Jean, *op. cit.*, p. 28.
- (30) Meunier, Oliver, *op. cit.*, pp. 44-46.

(31) Halilou, *op. cit.*, 1999, p. 34.

(32) Meunier, Oliver, *op. cit.*, p. 46.

(33) *Ibid.*, p. 41.

(34) 平野千果子『フランス植民地主義の歴史 奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院、2002年、266-272頁。平野は同著において、「彼らがフランスと同等の権利を求めたのは、従属から脱する手立てとして、まず支配者と対等の立場に立とうとしたという側面が強い」ことを強調し、「こうした力係を忘れて被支配者の『欧化志向』のみを強調する」ことは不適切であると述べている。また、彼らのような「エリートの思惑と、民衆の感情との間に齟齬がないか」についても考慮が必要であると述べている点も補足しておきたい（272頁）。